



城

第六十回

勝龍寺城

～明智光秀から見た山崎の戦い～

深草 祐一

今年の大河ドラマ「麒麟がくる」は、明智光秀を主人公にした物語ということで、このシリーズでいつか書こうと思っていた勝龍寺城を取り上げます。本能寺の変の後、明智光秀が羽柴秀吉に敗れた山崎の戦いの折、明智光秀はこの勝龍寺城の前方の塚に本陣を構え、羽柴軍を迎え撃とうとしました。山崎の戦いといえば、天王山が有名ですが、今回は、天王山に向かって勝龍寺城の前面に布陣した明智軍側の視点からご紹介したいと思います。

勝龍寺城の戦略的位置

勝龍寺城は、桂川に注ぐ支流2本が合流する地点に築かれた比較的小規模な平城ですが、注目して欲しいのは、その戦略的な位置です。勝龍寺城の南西約3kmの大山崎は、石清水八幡宮のある男山と天王山との間のわずか1km余りの隙間で桂川、宇治川、木津川が合流して淀川となる場所。現在でも、JR京都線、阪急京都線、東海道新幹線の他、名神高速道路の天王山トンネル、そして淀川の対岸には京阪本線が揃ってこの狭い地点を通っていることから分かるように、大山崎は、摂津国尼崎から、茨木、高槻、大山崎と、淀川の北側を通して京の東寺口へと続く西国街道の要衝でした。勝龍寺城は、この山と川のわずかな隙間を通り抜けてすぐの場所で、京へ向かう街道に睨みをきかせていたのです。

織田信長が足利義昭を擁して上洛すると、京の南の要である勝龍寺城には、足利将軍の家臣であった細川藤孝が配されました。その頃に、勝龍寺城は城郭として本格的に整備されたものと考えられています。それから、細川氏が丹後田辺城に移るまで、およそ10年間は細川氏の城でした。明智光秀が娘の玉（細川ガラシャ）を細川藤孝の嫡男の忠興に嫁がせたのも、細川氏の勝龍寺城在城の頃でした。明智光秀と細川藤孝は、共に足利将軍に仕えていた頃から親交があり、縁戚関係も結んで、かなり親密な関係にあ

りました。光秀が本能寺の変を起こした際、その細川藤孝が剃髪して田辺城に籠もってしまい、味方に付かなかったことは、完全に想定外だったことでしょう。

山崎の戦い —情勢—

本能寺で織田信長を襲撃した後、明智光秀は、信長の遺体が見つからないことに焦燥を感じつつも、信長の居城の安土城や自身の本拠地である坂本城がある近江方面の制圧を急ぎました。この時、織田軍団の有力な軍勢といえば、越中国魚津城で上杉方との戦いの最中であった柴田勝家、上野国厩橋城で旧武田領を支配下に組み込みつつ北条との最前線に立っていた滝川一益、そして、備中国で高松城を水攻めにしつつ毛利軍と対峙していた羽柴秀吉の軍勢の3つ。いずれも京からはるか遠方で強大な敵と対峙しており、すぐに動ける状況ではありませんでした。敢えて警戒するならば、上杉との戦を優位に進めていた柴田軍だったかも知れず、北陸への街道が通る近江国をいち早く制圧したのも、そのためだったかも知れません。またその他、すぐ近くの河内国では、信長の三男の織田（神戸）信孝と重臣の丹羽長秀が四国攻めのための兵を集めていましたが、本能寺の変の噂が伝わって逃亡が相次ぎ、明智軍と戦えるほどの即戦力にはなりませんでした。そして、織田信長の盟友であった徳川家康は、わずかな供回りだけで堺見物の最中であり、伊賀の山中を越えて命からがら三河へと逃走しています。光秀は、こうした間に近隣の諸将をできるだけ味方に付け、畿内に勢力基盤を確立させようと考えていたのではないかといわれます。しかし、上述の細川藤孝や大和国の筒井順慶はじめ、味方に付けられるはずだった武将は容易には動かず、それどころか、当分遠方に釘付けになっているはずの羽柴秀吉の軍勢がわずか10日足らずで摂津まで戻ってきます。秀吉は、「信長様は難を逃れ無事である」との虚報を流したと言われ、光秀から誘いを受けた武将の多くは様子を見

ざるを得なかったのでしょうか。そして、羽柴秀吉が大軍を率いて戻ってくると、織田信孝と丹羽長秀の軍勢をはじめ、明智光秀に従うかと思われていた撰津衆の高山右近、中川清秀らも羽柴軍に合流します。秀吉の下には織田方の武将達が続々と合流し、一説には4万にまで膨れあがりました。一方、明智軍は、近江方面の抑えに兵を割いていたこともあり、戦えるのは1万余り。目算が外れた光秀は窮地に陥りました。

山崎の戦い — 戦闘 —

しかし、ここで引いても勝機は無しと考えたのか、明智光秀は、大軍を展開できない大山崎の狭隘地の出口で、羽柴軍を迎え撃つ戦法に出ます。戦の詳細について信憑性のある資料は残されていないのですが、想像される経緯の一つを紹介しましょう。明智光秀は、勝龍寺城の前方の塚に本陣を構え、大山崎の出口に蓋をするように、斎藤利三、阿閉貞征、河内衆、旧幕府衆といった軍勢を展開させました。一方、信長の弔い合戦の実質的盟主に推された羽柴秀吉は、天王山南麓の宝積寺に本陣を置き、高山右近、中川清秀ら撰津衆に街道を先行させ、羽柴秀長、黒田官兵衛らの手勢を天王山の山裾の左翼に、そして、池田恒興、加藤光泰らの手勢を淀川岸の右翼に布陣させました。当時の大山崎付近は沼地が広がっており、軍勢が通れる場所は現在よりも更に狭かったと思われます。両軍は、天王山の麓すぐの、現在の名神高速大山崎JCTの京滋バイパス沿いに流れる小泉川を挟んで対峙しました。そして、最前線に布陣していた高山右近の手勢の左側へ、天王山の山裾を横切るように中川清秀の手勢が進軍してきたところに明智軍の一隊が襲いかかり、それをきっかけとし

て、明智軍主力の斎藤利三勢も攻撃を開始。本格的な戦闘が始まります。明智勢は高山勢と中川勢を窮地に追い込みますが、秀吉本隊から堀秀政の手勢が加勢に押し出してきたため、突き崩すことはできませんでした。また、明智勢の右翼部隊が高山勢、中川勢の側面を突くように進撃しますが、天王山麓に布陣していた羽柴秀長、黒田官兵衛らの左翼勢が押し出し、こちらも激しい戦闘となりました。このような状況から、後の世に、天王山を獲ったことが勝敗を決めたという伝説が生まれ、「天王山」が勝敗の分かれ目を意味する言葉になっています。しかし、戦況はそのようなものではなく、天王山の麓で一進一退の激しい攻防戦が続きました。その時、淀川沿いの沼地を進軍した池田恒興らの羽柴軍右翼勢が明智軍の左翼を急襲します。この日は雨が降っており、視界が悪く中のことでした。さらに、続いて丹羽長秀、織田信孝の手勢も押し出し、明智光秀本陣の側面を突くように襲いかかりました。数に勝る羽柴軍に左右から包囲されるような形となった明智軍は、中央の斎藤勢も押し返され、全体に動揺が広がって総崩れの様相となりました。明智光秀は、家臣が身代わりとなり時間を稼ぐ間に勝龍寺城まで撤退しましたが、平城の勝龍寺城では多くの兵は収容できず、逃亡も相次いで、みるみる手勢は減少してしまいました。そして、羽柴軍に城を囲まれ、打つ手が無くなった光秀は、夜のうちに密かに勝龍寺城を脱出し、本拠の坂本城へ向かいます。しかし、途中の小栗栖の藪で土民の落ち武者狩りに遭い、竹槍に刺されて命を落としたといわれています。光秀の首は翌日には羽柴軍に届けられました。本能寺の変からわずか12日目のことでした。



山崎の戦い 両軍の布陣

現在の勝龍寺城

勝龍寺城跡は、残された水堀と土塁に囲まれた主郭を中心に勝龍寺城公園として整備されています。そして、細川忠興、ガラシャ夫婦が新婚生活を始めた地ということで、夫婦の銅像が立てられています。櫓や塀などは模擬で建てられたもので、規模も大きくはありませんが、歴史に残る山崎の戦いの現場の距離感を感じられる点が一番の価値ではないかと思います。京都・大阪間で山崎を通ることがあったら、この地形と勝龍寺城の位置を意識して見ると面白いと思います。